

# まんだら通信

第178号(通巻209号)

平成23年(2011)04月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 巨大地震の救援に

三月十二日朝、盛岡市にある特例財団法人で、障害者が生き生きと働くために社会福祉事業団や社会福祉協議会、町内会、婦人団体などの協力により設立された作業所「市民福祉バンク」の佐藤事務局長さんに、何度目かの電話が通じました。佐藤さんは、「佐々木さんが、今日初めての電話の通じた人だ」とのこと。「昨夜は、まず電気のいらぬストープを、あちこちの避難所に配った」「何が要る？」との私の質問に「まだわかんねー」「なんか必要なものがあったら言つて下さい」と伝え電話を切りました。

十五日、「来週なら盛岡まで行かれるけど、必要なものはありますか?」、と佐藤事務局長に電話しました。



「日曜日に電気が点き始めた。今日は水も出てきているから盛岡市内は何とか大丈夫。毛布、食糧、水も何とかかなり始めた。ただ釜石と連絡が全く出来ないんだ。」と返事を切りました。

二十三日午後、二トントラックに山のように荷物を積んで、館山警察へ行き「緊急車両」の申請をして「緊急」と書かれた銀色の証書をもらいました。二十四日朝三時半、「緊急」の証書をフロントガラスに貼って盛岡に出発いたしました。

六時半少し前に宇都宮インターチェンジへ着くと、六時に交通規制が解除され、一般車も通行可能になっていました。しかし、大型トラックの多くは「緊急」の証書を前面に提示しています。那須高原サービスエリアでは、給油所に車の長い列が出来ていました。安達太良サービスエリアも同じように給油待ちの車の列がありました。沢山の車が、給油のために高速道路へ入ってきているようです。私のトラックの軽油も少なくなってきたので、国見のサービスエリアの給油所で、車の列に並びました。警備員さん

よねー。との答えです。十二、十三日の二日間、テレビにかじりついていた私には、釜石の津波による被害の映像が思い浮かぶので、想像が出来ます。

十九日土曜日、佐藤さんに電話。「何かほしいものはない?」と聞くと「敷布あるかね?何枚でもいいから」との返事です。「かいた婦人の村には、バザーの残りの布団があります。」と伝えました。「妊婦さんや乳幼児には敷布団がほしい」「掛け布団はどうですか。羽毛の掛け布団がありますよ。」の問いに「羽毛ならほしい。バスタオルや生理用品、子供のおもちゃや遊ぶもの、石鹸や歯ブラシ、あと防寒着とマスクと手袋」。

希望された品物は、三、四日あれば準備できると思つたので、「わかつた。連休明けに行きます。」と答えました。連休明けに電話し、「緊急車両」の申請方法を確かめると、「荷物を積んだ車と車検証、免許証と印鑑を持って来れば、その場で交付します。」という返事をもらいました。

二十六日(盛岡市民福祉バンク)も被害者だよねー、やっぱりいろいろなもの来ちゃうもん」と。どうも、テレビで中古衣料が配られている映像を見て以来、各家庭で要らなくなった中古の衣料品が、どつと送られて来るようになったようです。

宅急便も開通して、中古衣料が混ざつた状態で送られてくるのでしよう。

支援の難しさ、時間とともに変化する需要と迅速な対応、テレビの影響力の大きさ、百台を超えそうな給油待ちの車の列、タバコ屋さんの「売り切れ」や、コンビニエンスストアやパン屋さんの「一人三点まで」の張り紙などなど。

ちよつと譲り合えば不足することはなさそうなのに。

復興には、まだまだ時間がかかると思いますが。毛布は災害緊急援助物資として備蓄があつて十分なのですが、避難生活が長くなると、普通の寝具がほしくなるでしょう。

復興住宅の建設は思うようには進みませんが、仮設住宅に引越すようになると、「鍋釜茶碗」に代表される日用雑貨も必要になるでしょう。枕、夏掛け、シーツ、歯ブラシ、歯磨き粉、シャンプー、洗濯石鹸なども必要そうですね。

必要なものも、時間や季節と共に変化するものと思います。

かいた婦人の村  
作業指導員 佐々木清

## 余滴

◆卯月。もう今年も100日余りが過ぎました。

◆先月11日、千年に一度という大地震が東日本を襲いました。1ヶ月過ぎますが、被害の余りの大きさに、復興の兆しが見え始めたばかりです。

「あばらが3本足りない」我々房州人と違って、東北地方の人たちは粘り強いので、力強く立ち上がることでしよう。

『かいた婦人の村』の佐々木さんは、救援物資を満載して慰問に行ってきました。今月号はその様子を書いて下さいました。

私も、いても立ってもいられない

気持ちですが、ひよるひよるのじい様のボランティアでは先き様に迷惑なので、義援金を送ること、毎朝の勤行でご回向をするぐらいしか、残念ですが出来ません。

◆それよりも、福島原子力発電所の事故は、この国始って以来という、まことに厄介な事故ですね。あれは政府と東電とマスコミが、安全です安全ですとうそを言っていたのだから、いっそのこと無くしてしまえ、という意見の人もいますが、原子力発電所で作る電気は、全体の3分の1だそうだから、すぐにやめるといふ訳にも行かないでしょうね。

飛行機は墜落することがあるから作ってはいけない、ということと同じですから。原子力安全委員の、中部大学教授武田邦彦先生は、お金をけちらなければ地震や津波で壊れないものを作る力がある、といっておられます。震度7でも壊れない補強工事を、すぐに始めることが実際的で私は思います。

◆今月はキブシ【キブシ科キブシ属】です。薄い金色の可憐な鈴の房が、道端に咲き始めると、春本番が確かになります。ごくありふれた灌木ですが、何故か心魅かれます。

2011/04/09 龍渉



# につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

## 第六十四話 リヤカー

相撲界は相変わらず大変ですね。野球賭博の疑いで新聞を賑わしたかと思つたら、今度は「八百長」ですもんね。

先日、まだ三歳の孫がマジンガーZと仮面ライダーのおもちゃを戦わせていたので、「どっちが勝つたの？」と聞いたら、首を振って、かわいい声で「いまのは八百長」と言つたのには、さすがに驚きましたが……。

でも、「八百長」という言葉の語源、知ってますか？ 相撲界から誕生した言葉ですよ。ちよつと、ご紹介しましょうか。

明治の時代、東京は両国付近に大きな八百屋さんがありまして、店の主人は、名前を長兵衛と言いました。店が両国にあつたことから、近くの相撲部屋が大変なお得意さんでございまして、たくさん野菜を買ってくれますので、商売も繁盛しておりました。

この長兵衛さん、大変に碁が好きだったんだそうですよ。なかでも碁は、お得意さんのひとり、伊勢ノ海五太夫という親方。

長兵衛さんは、いつも商売そつちのけで親方と碁を打っておりますが、どういうわけか、いつも長兵衛さんの負け。長兵衛さんが悔しがる姿を見ては、親方は喜んでいたので、ある時、回向院近くで大きな「碁会所開き」が行われまして、ゲストの本因坊秀元の対戦相手に、なんと、この長兵衛さんが選ばれたのです。

本因坊と言えば、日本一の名人の称号。しかも、この長兵衛さん、あろうことか、本因坊を相手に善戦し、勝負はあわやというところまでいきました。

驚いたのは、伊勢ノ海親方です。そし

て、気がついた。八百屋の長兵衛さんは、これまでずつと、商売のお得意である私に、わざと負けてくれていたのだと。

そこから、故意に負けることを相撲の世界で「八百長」と言うようになり、やがて、相撲以外でも使われるようになったというわけですね。

ですから、「八百長」というのは、相撲の世界では、昔からあつたということですね。

いやいや、このように、語源を調べてみると、おもしろいですね。先日、ふと子ども時代を思い出して、「リヤカー」の語源を調べてみました。昔、農家で荷物を乗せたり、道具を乗せたりして、お父さんが引つ張り、お母さんが後ろから押したり。

そんな姿があつたものです。でも、いまの若い人は「リヤカー」なんて知らないでしょうねえ。

その「リヤカー」、和製英語なんです。え。それも、そのはず、日本人が大正時代に発明したものだそうです。なんでも、当時、日本にバイクのサイドカーが輸入されて、それをサイドでなくて、後ろにつけたらもつと荷物が運べるだろうということで、鉄パイプと板で車輪のついた荷台を作つた。サイドでなく、リア（後ろ）につけたんで、リアカー。

それが、「リヤカー」となり、のちに、人力でも引つ張つたというわけですね。そうそう、その「リヤカー」で、こんな悲しい話を聞きました。

時代は戦前、旧満州での話です。主人公は、篠原浩一郎さん。いまは、企業コンサルタントで活躍されていますが、かつては、全学連の闘士で、委員長も務めたことのある方です。

その篠原さんがまだ小さかつた頃、お父さんは満州・鹿島組という土建会社の若き建築技師でした。だから、彼も満州で暮らしていました。ところが、小学一年

生の時に、その満州で、お父さんが結核で亡くなります。当時、結核という病気は、不治の病であるだけでなく、人に感染するとと言われて、亡くなつても誰も面倒をみてくれないものだったので。

長男だつた浩一郎君は、「リヤカー」の上に布団を敷き、お父さんの亡きがらを中国人にさせてもらうと、お母さんと四歳の妹に後ろから押しもらいながら、ひとり「リヤカー」を引つ張つて、火葬場まで運んだそうです。

折から、真つ赤な夕焼けが空に広がつていて、そのなかを「よいしょ、よいしょ」と必死で「リヤカー」を引つ張つたそうです。止まると、再び動かすのが大変だからです。

お母さんは後ろから黙つて押していましたが、涙で前が見えなくなつて、何度も止まつては、手ぬぐいで顔をぬぐつていたと言います。

「お母さん、止まつたらダメだ。押して、押して！」

小学一年生の浩一郎君は、その時、こう思つたそうです。

「僕は長男なんだ。お父さんの代わりに、がんばるぞ。お父さん、僕がお母さんと妹をきつと、日本に連れて帰るからね」

真つ赤な夕映えの中、そう強く心に誓つた少年がいたんですね。

その後の親子三人の生活は、大変だつたことは言うまでもありません。戦争が終われば、そこは中国、まさに敵地です。誰も助けてくれない。そんななかを、昭和二十二年、ようやくの思いで、一家は日本に帰つてきたそうです。

そんな篠原さんは、先日、私にこう言いました。

「つらいなんて感じなかった。そんなことを言つてる場合じゃなかったから。どうやって、明日、生きていこうか、お母さんと妹をどうやって守れるかって、子供

心に、そればかり考えてきたからね」

でも、別れ際にひとつだけ、つらかつた思い出を語ってくれました。

「おなかがすいてねえ。父が死んだからお金がない。母はどこかに物乞いに行つている。」

僕は、男の子だから、我慢しなくちゃと思つた。ふと、見たらねえ、四歳の妹が、人の家で飼つている犬の皿に入つていた残飯を食べようとしてね、いまにも犬に噛みつかれそうになつてた。あの時は、悲しかつたねえ」

お父さんの亡きがらをリヤカーで運び、犬の餌にさえも手を伸ばそうとした四歳の妹をじつと見ていた小学一年生。

食べたくなないと給食を残す今の子供たちは、大人になつても、「飢え」という言葉の本当の意味を、一生わからないだろうと思ひますが、それは言い過ぎですか？

月刊誌MOKUに連載中のお話を、作者の三遊亭鳳豊師匠と出版社のご好意で、皆様にお届けしています。

今月のお話し『リヤカー』はMOKU四月号からの転載です。

私も両親と妹を満州で失っています。不思議としか言えないような縁でこうして生きていますが、場合によっては私も、多分年ごろも同じ『リヤカー』の篠原さんのような苦勞をしたのかも知れないと、身につまされる思いで読みました。

表紙の写真について

昔、お寺のおばあさんが花御堂を作つていた頃と同じように、出来るだけ子どもたちを手伝ってもらっています。

花の出荷が終わつても、この日まで畑を片づけず待っていてくれる親戚があるお陰で、惜しげなく活きのよい花を使うことが出来、今年も、お釈迦さまのご満足のお顔を拝むことが出来ます。

